View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

「選べる」関係と「選べない」関係 ―夫婦関係の二側面―

著者	大和 礼子
雑誌名	家族研究年報
巻	16
ページ	38-50
発行年	1991-03-31
その他のタイトル	“Selectable”Bonds and “Unselectable”Bonds as the Emotional Bonds Between Wife and Husband
URL	http://hdl.handle.net/10112/1978

≪論　文≫

「選べる」関係と「選べない」関係

——夫婦関係の二側面——

大 和 礼 子*

はじめに

近代家族の特徴は夫婦愛，母子愛，家族愛といった成員間の心の結びつきが，制度や利害による結びつきより，また同性・同年齢集団との心の結びつきより，優先していることであるといわれる［Aries, 1960・Shorter, 1975 など］。これは実態というよりも，そのような理念，あるいは規範が広く社会に浸透しているということであろう。たしかに近代社会に生きる多くの人にとって，心の結びつきがない家族といった考えは耐え難く思われる。しかしこの規範のもとで，人々は実際のところどのような情緒的結びつきを結んでいるのだろう。実際の結びつきは，規範ほどには一貫してもいなければ，一枚岩でもないかもしれない。そこで本稿では，近代家族にはこのような規範があるということをおさえた上で，心の結びつきすなわち情緒的結びつきといわれるものを，家族成員の行動に即して見ていくことにしよう。ただし「家族」の外延をとらえることは難しいので，本稿では「世帯」におきかえる。

ところで家族療法の知見によると，情緒的結びつきはコミュニケーションによって形成，維持，確認されるという［佐藤，1986］。そこで情緒的結びつきを形成，維持，確認する行動を「情緒行動」と呼び，情緒行動とはコミュニケーション行動であると操作的に定義する。そして夫婦間の情緒行動を次の三点から分析することにする。まず第一に，夫婦間の情緒行動を分節化し，それぞれの情緒行動に影響を与える要因を探る。第二に，それぞれの情緒行動が夫婦関係に対してもつ意味を考察し，情緒的結びつきといわれるものの二側面を明らかにする。第三に，情緒行動を現代社会の年齢階層構造との関連で考察する視角を提案する。

1．調査の概要及び分析対象

本稿で用いるデータは，1987 年 7 月に大阪府千里ニュータウンの集合住宅において

＊　やまと　れいこ　大阪大学博士後期課程 2 年

実施された調査から得られたものである。標本抽出は，集合住宅を単位とした二段階エリアサンプリングを行い，491 世帯が抽出され，面接法と留置法によって調査が実施された。一世帯につき面接票，女性票，男性票がとられたが，本稿の分析では主に女性票の質問項目を用いるため，女性票が回収された世帯から分析対象を選んだ。まず女性票が回収された世帯を世帯形態別に分類すると表 1 のようになる。世帯の形態によってその社会的条件が大きく異なるため，本稿では表 1 の「夫婦と同居子からなる世帯」に分析を限定する。

表 1　女性票が回収された世帯の，世帯形態別分類（%）

単身	夫婦	片親	夫婦•同居子	三世代	その他	計
4 (1.2)	32 (9.8)	17 (5.2)	217 (66.8)	7 (2.2)	48 (14.8)	325 (100.0)

ライフステージは次のように第一子の成長に注目して分類した。このうち「夫婦と同居子からなる世帯」に該当するのは 3 から 7 である。これらの特徴は表 2 に示した。

ライフステージ 1　同居している配偶者がいず，子供もいない単身世帯
2　同居している配偶者がいて，妻は 45 歳以下，子供はいない
3　第一子が小学校入学前……〈未就学〉と略す（以下同様）
4　第一子が小学生または中学生……〈小中学〉
5　第一子が高校生または大学生または高専生または専門学校生……〈高以上〉
6　第一子が 18 歳以上で学籍なし……〈一独立〉
7　末子が 18 歳以上で学籍なし……〈末独立〉
8　同居している配偶者がいて，妻は 46 歳以上，子供はいない。

2．夫婦間の情緒行動

(1)　夫婦間における二つの情緒行動

まず夫婦と同居子からなる世帯の情緒行動がどのような構造をしているかを見るために，以下の質問項目に対するデータを用いて分析を行う。ただしこれらのデータは女性票から得られたものであるから，本稿の分析は妻・母の視点からのものである。

1)御主人はその日の出来事をどの位あなたにお話になりますか…「夫・出来事」と略す

2)新聞やテレビで知るニュースや社会問題をどの位御主人と話し合われますか…「夫・ニュース」

3)その日の出来事や，新聞やテレビで知るニュース等をどの位お子さまと話し合われますか…「子・会話」

4)御主人に対して御自分の喜びを率直に表現しておられますか…「夫・喜び」

表2　対象世帯のライフステージ別特徴

ライフステージ		3 未就学 妻	3 未就学 夫	4 小中学 妻	4 小中学 夫	5 高以上 妻	5 高以上 夫	6 一独立 妻	6 一独立 夫	7 末独立 妻	7 末独立 夫
実数（%）		39 (18.0)		76 (35.0)		41 (18.9)		27 (12.4)		34 (15.7)	
年齢	20 代	58%	32%	4%	−%	−%	−%	−%	−%	−%	−%
	30 代	42	66	83	64	13	8	−	−	−	−
	40 代	−	3	13	36	73	70	63	30	36	9
	50 代	−	−	−	−	13	20	37	70	55	82
	60 〜	−	−	−	−	3	3	−	−	9	9
		100%									
学歴	初等	−%	−%	6%	5%	15%	14%	23%	8%	35%	10%
	中等	49	46	59	44	69	50	64	60	55	58
	高等	51	54	35	51	15	36	14	32	10	32
		100%									
子供の数	1 人	41%		8%		15%		−%		35%	
	2 人	59		59		59		70		50	
	3 人	−		32		24		26		12	
	4 〜	−		1		2		4		3	
		100%									
第一子の年齢		0〜6 歳 平均 3.3		6〜15 歳 10.3		15〜22 歳 18		19〜33 歳 22.6		18〜44 歳 24.8	
末子の年齢		0〜6 歳 平均 1.7		0〜15 歳 6.7		6〜22 歳 14.4		10〜22 歳 16.7		18〜28 歳 21.9	
世帯年収	上位	3%		31%		43%		37%		42%	
	中位	40		39		38		42		35	
	下位	57		31		19		21		23	
		100%									

5)御主人に対して御自分の悲しみを率直に表現しておられますか…「夫・悲しみ」
6)御主人に対して御自分の怒りを率直に表現しておられますか…「夫・怒り」
7)お子さんに対して御自分の喜びを率直に表現しておられますか…「子・喜び」
8)お子さんに対して御自分の悲しみを率直に表現しておられますか…「子・悲しみ」
9)お子さんに対して御自分の怒りを率直に表現しておられますか…「子・怒り」
10)いやなことがあった時，御主人にどの位そのことを打ち明けられますか…「夫・いやなこと」

この 10 個の質問項目に対して，完全回答のあった 204 ケースについて，「いつもしている」を 5，「たいていしている」を 4，「時々している」を 3，「あまりしない」を 2，「ほとんどしない」を 1 と得点化した。これらを用いて主成分法による因子分析を行い，

固有値1以上の因子三個を選択した。この三因子によって全分散の65.9%が占められるので，説明力はかなり大きい。次に因子解を解釈しやすいものとするために，バリマックス法による直交回転を行った。その結果が表3である。表3には，各因子において負荷量の高い質問項目どうしをまとめて配列した。複数の因子に負荷量の高い項目が二項目（10と7）あるものの，ほぼ単純構造が得られたと考えてよい。

表3　世帯内情緒行動項目の因子負荷行列（バリマックス回転）（N＝204）

項目No.	質問項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	共通性	平均値	標準偏差
5）	夫・悲しみ	.842	.127	.128	.741	3.37	1.14
4）	夫・喜び	.776	.257	.086	.675	3.81	1.11
6）	夫・怒り	.706	.152	.182	.555	3.56	1.02
10）	夫・嫌なこと	.671	.467	.122	.684	3.47	1.18
7）	子・喜び	.551	.087	.453	.517	4.15	0.86
1）	夫・出来事	.203	.849	.056	.765	3.71	1.48
2）	夫・ニュース	.310	.799	.110	.747	3.97	1.23
8）	子・悲しみ	.361	−.082	.752	.702	3.16	1.17
9）	子・怒り	.247	.065	.743	.617	3.63	1.10
3）	子・会話	−.220	.357	.641	.587	4.10	1.31
寄与率（%）		.415	.132	.112	.659		

次にそれぞれの因子の解釈を行う。第Ⅰ因子は，「夫・悲しみ」「夫・喜び」「夫・怒り」など夫に対して自分の感情を表出する行動の質問項目において，因子負荷量が高い。つまり夫に対する「感情表出行動」の因子である。次に第Ⅱ因子には，「夫・出来事」と「夫・ニュース」が高い因子負荷量を示す。夫との「会話行動」を示す因子である。第Ⅲ因子には，「子・喜び」「子・悲しみ」「子・怒り」「子・会話」が高い因子負荷量を示す。したがって第Ⅲ因子は子供に対する「感情表出行動と会話行動」を示す因子である。

因子分析の結果からわかることは，第一に，夫婦間の行動についての因子が二つ抽出されたことから，夫婦間の情緒行動には感情表出行動と会話行動の二種類あり，それぞれが独立だということである。第二に，母子間の行動についてもまた別の因子が抽出されたことから，母子間の情緒行動も夫婦間の二種の情緒行動とは独立であることということである。このことは項目7)のように夫婦間の行動についての項目と母子間のそれとが相互に関係している部分もあるが，やはり夫婦間の行動についての項目どうし，あるいいは母子間の行動についての項目どうしの方が，相対的に関係が強いことを示している。

この結果から注目されることは，夫婦間の情緒行動は感情表出行動と会話行動の二つに分かれるということである。この二つはどう違うのか。夫婦関係のどのような側面を表しているのか。そこで以下では夫婦間の二つの情緒行動に焦点を絞って分析していきたい。

(2) 二つの情緒行動とライフステージおよび人的ネットワーク

夫婦の情緒的結びつきに影響を与えるものとして，既存の研究でよく取り上げられてきたのは，「ライフステージ」と，共働きあるいは家事の共同といった「人的ネットワーク」のあり方である。また日常経験的にも，これらは何らかの影響を持っていると思われる。そこでここではライフステージと人的ネットワークが夫婦間の情緒行動にいかに影響を与えるかを見ていきたい。人的ネットワークとしては，世帯外に注目した「妻の職業の有無」「妻の参加集団の個数」，世帯内に注目した「夫の家事手伝いの個数」「子供の家事手伝いの個数」を取り上げる。

はじめに感情表出行動（第Ⅰ因子），会話行動（第Ⅱ因子）のそれぞれについて，各ケースの因子得点を計算し，下から3分の1を行動の頻度が「少」の人，中間の3分の1を「中」，上から3分の1を「多」として三段階に分けた。次に，感情表出行動，会話行動のそれぞれについて，ライフステージおよび人的ネットワークとのクロス集計を行った。

まずライフステージとの関係をみてみよう。図1はライフステージ別にみた感情表出行動の頻度である。ライフステージ3（L3と略記する。以下同様）では感情表出行動「多」の人が最も多い。L4，L5と感情表出行動「多」の人が減り，L5では「多」が最も少ない。L6，L7では「多」の人と「少」の人の両極に分解する傾向が見られる。

図1　感情表出行動（ライフステージ別）（$\chi^2=28.3$　sig<0.01）

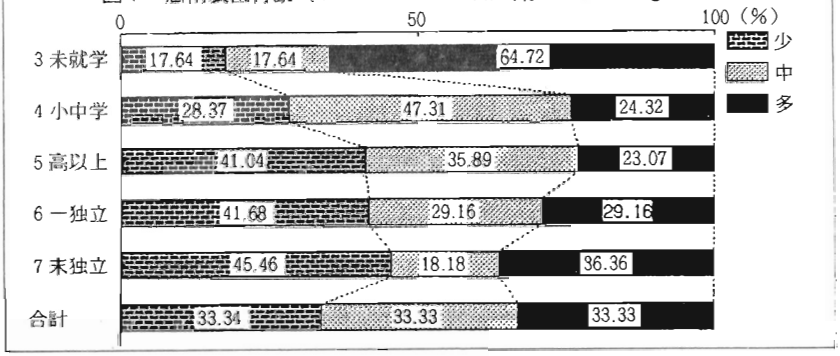


図2はライフステージ別にみた会話行動（第Ⅱ因子）の頻度である。ライフステージによる違いは見られない。

次に人的ネットワークとの関係をみてみよう。「妻の職業の有無」との関係をみると，感情表出行動も会話行動も，「妻の職業の有無」には影響されないことがわかった。また「妻の参加集団の個数」によっても影響されなかった。

次に「夫の家事手伝いの個数」との関係をみてみよう。図3は「夫の家事手伝いの個数」と感情表出行動との関係であるが，家事手伝いが「0個」の人は感情表出行動も「少」が多いことがわかる。一方会話行動は，「夫の家事手伝いの個数」によっては影響を受けなかった。念のために「子供の家事手伝いの個数」との関係をみたが，感情表出

図2　会話行動（ライフステージ別）（有意な関係はない）

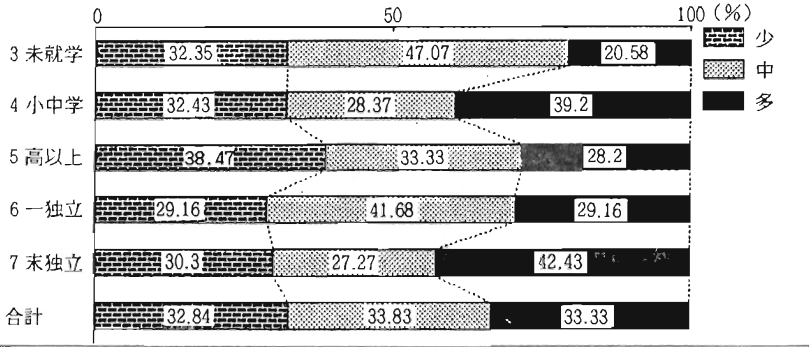
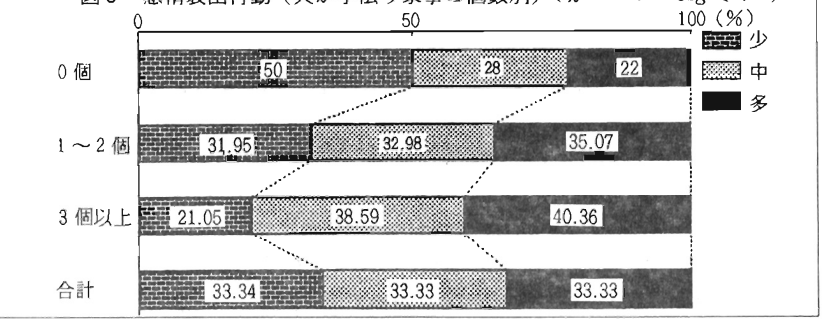


図3　感情表出行動（夫が手伝う家事の個数別）（$\chi^2=10.6$　sig<0.05）



行動も会話行動も関係はなかった。

以上から，感情表出行動はライフステージと「夫の家事手伝いの個数」に影響されるが，会話行動はライフステージにも，人的ネットワークにも影響されないというとがわかった。同じ夫婦間の情緒行動であっても，両者はこのように異なるのである。

ところでライフステージとは何なのだろう。ライフステージの違いは人々の生活をどう変えるのか。そこで次にライフステージと人的ネットワークとの関係をみてみよう。

図4はライフステージ別にみた「妻の職業の有無」である。「有職」の人はＬ３では最少であるが，Ｌ４で増え，Ｌ５で最多となる。Ｌ６，Ｌ７とまた少なくなる。

「妻の参加集団の個数」も職業と同様の傾向を示した。つまりＬ３〈未就学〉では参加集団が「１個以下」の人が多いが，Ｌ４〈小中学〉，Ｌ５〈高以上〉では複数の集団に参加している人が多くなる。そしてＬ６〈一独立〉，Ｌ７〈末独立〉では両極化する。これらの集団のうち「趣味，スポーツ，学習等のサークル」など参加が個人の選択に任されているものは，ライフステージの影響を受けないのに対して，「ＰＴＡ」や「同窓会」など個人の自由にならないものは，ライフステージの影響を受けることがわかった。

一方夫についてもほぼ同様の傾向が見られた。「同僚とのつきあい」については，Ｌ３〈未就学〉では少ないが，Ｌ４〈小中学〉以降は多くなる。「参加団体の個数」もＬ

図4　妻の職業の有無（ライフステージ別）（$\chi^2=29.6$　sig<0.01）

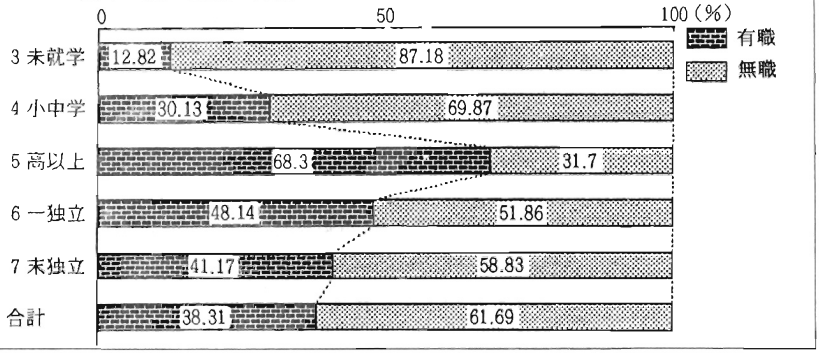
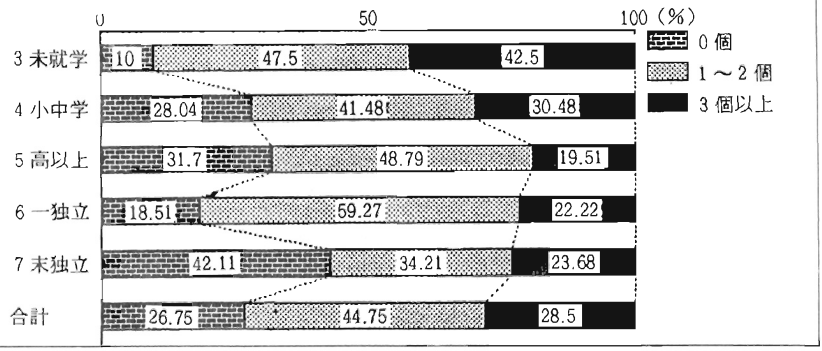


図5　夫が手伝う家事の個数（ライフステージ別）（$\chi^2=16.0$　sig<0.05）



3では最少だが以降は増え，そして再び減る。ただし最多になるのはＬ６〈一独立〉であり，妻の場合とは一ライフステージずれる。

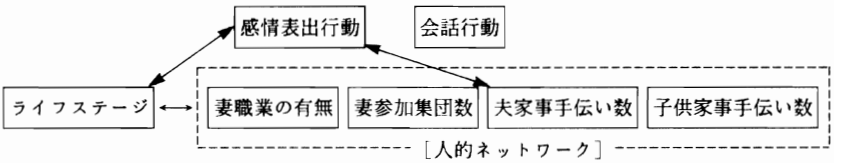
図5はライフステージ別にみた「夫が手伝う家事の個数」である。「３個以上」の人は，Ｌ３で最多，Ｌ５で最少になり，Ｌ６，Ｌ７と再び微増する。「０個」の人はＬ３で最少，Ｌ４，Ｌ５と多くなる。Ｌ６は「１～２個」の中レベルが多く，Ｌ７では「０個」と「３個以上」の両極化する。ちなみに「子供が手伝う家事の個数」をみると，Ｌ３では０個の人がほとんどであったが，Ｌ４以降は手伝う人が激増する。

以上の分析からわかることは，ライフステージがＬ３〈未就学〉からＬ５〈高以上〉へ移行することは，夫婦の人的ネットワークが排他的二者関係に閉じたものから，夫婦以外の人間関係を含むものへと，いわば焦点を拡散していくことであるといえよう。焦点の拡散はＬ５（夫はＬ６）でピークを迎え，夫婦以外のネットワークが最大になる。次にＬ６〈一独立〉，Ｌ７〈末独立〉への移行は，夫婦が夫婦外のネットワークから離脱し，再び夫婦の二者関係に焦点化していくことだといえよう。しかしその様相はＬ５までほど単純ではない。まず妻と夫では離脱の時期にずれがあり，妻の方が一ライフス

テージ早く離脱する。また世帯外のネットワークが多い人と少ない人，夫が家事を手伝う人と手伝わない人の両極化がみられる。

ここで今までの分析を図示すると図6のようになる。矢印で結ばれているものは何らかの関係があることを示している。会話行動はライフステージにも人的ネットワークにも影響されていない。一方感情表出行動はライフステージと「夫の家事手伝いの個数」に影響されている[1)]。またライフステージは人的ネットワークのどれとも関係がある。

図6



ところでライフステージの影響といった場合，ライフステージのどの側面の影響なのであろうか。L6〈一独立〉やL7〈末独立〉などで感情表出行動が両極化し，感情表出「多」の人が再び増加することを考えると，単なる年齢や結婚経過年数ではない。本稿のライフステージが第一子の成長の度合であることを考えると，子供の成長の度合いによる夫婦関係のあり方の違い，という側面が重要であると考えられる。

(3) 感情表出行動と会話行動——情緒的結びつきの二側面——

それではなぜ，夫婦関係のあり方や夫の家事手伝いが感情表出行動には影響を与え，会話行動には与えないのであろうか。そのためにまず，感情表出行動と会話行動がそれぞれ何を意味するのかについて考察しよう。

このような対人行動のもつ意味は，コミュニケーション論や対面的相互作用論において研究されてきた。まずコミュニケーション論によると，人と人が対面している状況では「コミュニケーションしない」ことは不可能だということである。言葉以外に，表情，態度，文脈などが不可避的に何らかのメッセージを伝えてしまう。このことはコミュニケーションによって送られるメッセージには二つのレベルがあることを示している。たとえば共働きの妻が残業で帰宅が遅れ，疲れて帰ってきた。そこで玄関を開けて夫の顔を見た途端に口から出たのは，「今日もまた○○さんとぶつかっちゃったのよ」という言葉であった。この場合，妻は夫に言葉によって「同僚と意見が合わなかった」という主観的事実を伝えている。これを「内容レベル」という。「内容レベル」は言語内容による情報の伝達である。それと同時にそう言うときの表情や声の抑揚，残業で遅くなったという文脈などの非言語的要素によって，「遅くまで働いてきた自分をねぎらってほしい」という要求をも伝えている。つまり夫にねぎらってもらうことによって，いたわりあっている夫婦という二人の関係を確認したかったのである。このような情緒的関係を確認するよう伝えているレベルを「関係レベル」と呼ぶ。「関係レベル」でどのような関係が伝えられるのかは，二人がそれまでに取り結んでいる関係によって規定される

という［Watzlawick, Bavelas and Jackson, 1967。例については，佐藤，1986］。

この「関係レベル」のコミュニケーションと社会秩序との関係に注目したのはゴッフマンである。彼によると，私たちの日常的な対面的相互作用の状況は一つの社会秩序を構成している。この秩序が何かの要因で崩れると，円滑な相互作用が妨げられたり，相互作用の参加者の対面が傷つけられたりする。そこで参加者は皆，相互作用秩序の確認維持と，それが崩れたときのすばやい修復を期待されている。そのための行動を相互作用儀礼と呼ぶ。しかも相互作用秩序は多くの場合，既存の社会関係を反映している［Goffman, 1967］。

このような理論を基に，その日の出来事やニュースを話し合う会話行動について考えてみよう。日常のあれこれについて，たとえそれがたいした意味のないことであっても，その場にいる相手に話しかけるというのは，相互の関係が円満で協力的であることを確認する相互作用儀礼である。つまり会話行動で確認を要求している情緒的関係とは，日常的・実践的な「円満志向」の関係といえる。相手からの会話行動に対しては，それに答えるのが「円満志向」関係を確認する行為であり，相互作用秩序を維持することになる。

一方感情表出行動で確認を要求している情緒的関係とは，自分の感情を相手も同じように経験し，深い共感に入るという関係である。こちらは「個人的感情志向」の関係であるといえよう。そして相手から感情表出行動がなされたときには，相手の感情に共感することが「個人的感情志向」関係を確認する行為であり，秩序を維持することになる。

これらの行動が夫婦という社会関係で行われると，「円満志向」関係は半永続的，無限責任による「生活の共同」という社会関係を反映し，一方「個人的感情志向」関係は「二人の異性間の共感」関係を反映する。村瀬は夫婦関係を「治める」関係と「戯れる」関係に分けている［村瀬，1984］が，この区別にしたがうならば，生活の共同という関係は「治める」関係，相互の共感という関係は「戯れる」関係ということができよう。

ところでここで注意したいのは，生活の共同という関係にも，「円満志向」関係という情緒的側面が不可避的にまとわりついているということである。互いの生活に対して半永続的な無限責任を負う関係であるから，マズローのいう安全欲求や帰属欲求はこの関係においてこそ充足される。そこでは生活する上での安心感，信頼感といったものが互いを結びつけているだろう。しかしそれは共感における結びつきとは異なるものである。

ここまでの諸関係を整理すると，次のようになる。

関係 ＼ 情緒行動	情緒的関係（関係レベル）	社会関係
会話行動	「円満志向」関係	生活の共同
感情表出行動	「個人的感情志向」関係	異性間の共感

このように二つは別の性質を持つ関係であるが，近代的な恋愛結婚の理念においては，両者は不可分に結びつけられている［井上，1973］。たとえば何かに共感しあえれば，

生活の共同もうまくいくはずであるし，生活の共同がうまくいっているならば，どんなことにも共感できるはずだといった考え方である。つまり，一方が確認できれば他方の存在は当然のことと予想されるというのがこの理念である。しかしこれは両刃の剣であり，もし一方が確認できなければ他方も存在しないと予想されることになる。

ところで関係を確認するにあたり，会話行動に応じることは，「円満志向」関係を維持しようという意志と相互作用秩序についての最低限の知識があるなら，比較的容易にできる。しかし相手の感情に深く共感することは容易ではない。共感にはいるためには一般に，当事者間で立場や利害の違いが無化されることが必要なのである[2)]。これを夫婦にあてはめると，異質なものを排除した二者関係に入り込めること，しかも夫婦間の立場や利害の違いを乗り越えられることになろう。しかしこれは多くの人間関係が交差した中で，互いに異なる役割を持ちつつ行動している日常生活では，難しい条件である。

この条件が満たされず，感情表出行動をしても共感が成立しなければ，確認しようとした関係を拒否されたと感じ傷つく。そしてこのようなことが重なると，共感してもらえないことをあらかじめ予想して，感情表出行動は抑制される。この場合でも会話行動を続けることはできよう［佐藤，前掲書］。

(4) 「選べる」関係と「選べない」関係——夫婦関係の二側面——

それでは，感情表出行動がライフステージや夫の家事手伝いに影響を受け，会話行動が影響を受けないのはなぜかを，共感成立の条件から考えてみよう。

まずライフステージについてであるが，ライフステージの違いとは子供の成長度合の違いである。L 4，L 5では子供は小・中学生から大学生頃である。この時期には夫婦は，子供という異質な存在を含めた関係の中で，親として振舞うことが日常的相互作用秩序となる。排他的二者関係の条件はない。この中で異性間の共感関係を確認する感情表出行動をしても，秩序を崩し周囲をとまどわせるばかりで，共感が成立する可能性は小さい。ところが子供が幼児期のL 3や独立しはじめるL 6，L 7では，夫婦と子供との間に境界があり，二者関係に入り込むことができる。したがって共感が成立する可能性が大きくなる。

次に夫の家事手伝いについて考えてみよう。夫は仕事，妻は家事という関係では相互に立場の違いがあり，無条件の共感は難しい。しかし家事を共同することは，双方の立場を近づけることであり，感情表出行動をして共感を得る可能性は大きい。

つまり共感は状況によって成立するときもあれば，しないときもある。もし成立しなければ，恋愛結婚理念のもとでは，夫婦関係全体が疑われることになる。こうした危険を避けるために，共感が成立する可能性が小さいときには感情表出行動ははじめからせず，会話行動によって夫婦関係の確認を行う。反対に共感が成立する可能性が大きいときには，両方の行動によって夫婦関係の確認を行っているのである。

このように恋愛結婚理念のもとでは，感情表出行動も会話行動もともに夫婦関係を確認するよう用いられる。しかしこの理念をいったん「括弧に入れて」人々の行動をみるならば，情緒的関係のうち「個人的感情志向」関係は，状況によって結んだり結ばなかっ

たりしている。しかし「円満志向」関係は，状況の如何にかかわらず常に結ぼうと努めている。上野にならって人間関係の結び方「選べる」対「選べない」，つまり加入・脱退に「拘束性がない」対「拘束性がある」で分類するならば［上野，1987］，夫婦間の情緒的関係のうち，「個人的感情志向」関係は「選べる」関係であり，「円満志向」関係は「選べない」関係であるといえよう。このことはとりもなおさず，夫婦相互の共感は「選べる」関係であり，生活の共同は「選べない」関係であるといえる。現代核家族の夫婦関係は，その当事者にとって，このような二側面を持っているといえよう。

3．夫婦関係と年齢階層構造

最後に，夫婦関係のあり方と年齢階層構造との関係について考えられることを述べたい。

今までみてきたように，ライフステージや夫の家事手伝いによって夫婦関係は影響を受ける。また夫の家事手伝いにはライフステージが影響を与えている。つまりライフステージは直接，間接に夫婦関係のあり方に影響を与えているのである。

それではライフステージとは何だろうか。マクロな視点からみるならば，人を年齢（または子供の年齢）によって社会のある位置に振り分けるという，年齢階層構造の現れといえよう［Riley, Foner and Waring, 1988］。過単純化のそしりを恐れずあえて，近代社会におけるその見取図を示せば次のようになるだろう[3)]。近代社会における結婚とは，夫婦をその親や兄弟との関係から引き離し，共同生活の単位――互いに無限責任を持ち合うものどうし――にすることを意味する。結婚は夫婦の排他的二者関係ではじまる。子供ができると，子供の独立までは夫婦がその基本的生活を維持する責任を負う。特に幼児期はつきっきりの世話が必要なため，夫婦は直接協力し合う必要がある。この時期がＬ３〈未就学〉にあたる。

子供が学齢期になると，そのような世話は必要でなくなり，夫婦の協力は間接的になる。また子供は自分の意志と行動力を持つようになるため，世帯内関係は三者関係になる。また子供の世話に必要な労力が減った分，夫婦は生産や社会統合の中心的担い手として，世帯外の生活に積極的に関与する。世帯外の諸制度もこれらの人々を強く吸収する。ところが近代社会においては，壮年期の人々が生産や社会統合に関与する領域は男女別になっているので，夫婦は世帯外ではまったく異なった生活をおくる。この時期がＬ４〈小中学〉，Ｌ５〈高以上〉にあたる。

その後子供が経済的に独立しはじめると，たとえ同居していようと心理的には夫婦の排他的二者関係にもどることができる。同時にこの時期には，世帯外の諸制度が人に参加を強制することが少なくなる。したがってどのような人間関係を持つかは，個人的資源や好みに委ねられる部分が多くなる。この時期がＬ６〈一独立〉，Ｌ７〈末独立〉にあたる。Ｌ６，Ｌ７でみられた両極化の傾向は，このライフステージの脱制度性あるいは老人期への過渡期的性格を表しているのではないだろうか。

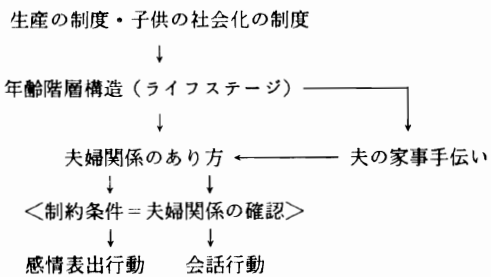
そしてこのような年齢階層構造は，近代社会に典型的とされる生産の制度と，子供の

社会化の制度を反映しているのではないだろうか。生産の制度とは，職住分離，生産の担い手は壮年男女に限られていること，生産における男女の領域が分離していることなどが考えられる。また子供の社会化の制度とは，核家族による子供の養育と近代的学校制度などが考えられる。

4．まとめと課題

今まで行った考察をまとめてモデル化すると，図7のようになるだろう。社会の生産と子供の社会化の制度が，年齢階層構造をかたちづくっている。ライフステージは年齢階層構造の現れである。年齢階層構造が直接的に，および夫の家事手伝いを媒介して間接的に，夫婦関係のあり方に枠を与えている。そしてそれが情緒行動に影響を与えているのであるが，制約条件として夫婦関係の確認があるために，感情表出行動と会話行動では現れ方が異なるのである。

図 7



最後に今までの分析から考えられることを，三点ほど指摘しておきたい。

一つめは，現代核家族における夫婦の情緒的結びつきには，「円満志向」関係と「個人的感情志向」関係の二つがあり，それぞれに対応して，「生活の共同」と「相互の共感」という社会関係があることがわかった。恋愛結婚あるいはそれと表裏一体の近代家族の理念においては，両者は不可分のものとされている。しかし実際には，人々は状況によってこれらを使い分けている。このような両関係の使い分け，組合せは，夫婦や家族とそれを取り巻く人的ネットワークの組み方を見る一つの視点となるのではないか。

二つめとして，我々は「家」との対照から，近代家族の結びつきとして情緒的結びつきを重視し，その中でも相互の共感による結びつきを重視しがちであったといえないだろうか。しかし本稿のデータによると，人々がライフステージを通じて維持しようとしているのは「生活の共同」という関係であった。このことは現代においてもなお，「生活の共同」という側面から夫婦や家族をみていくことの重要性を示唆しているのではないか。

三つめとして，L6〈一独立〉，L7〈末独立〉の人的ネットワークは，L5〈高以上〉までの枠組みによると，両極化，個別化としかとらえられていない。つまりその固

有の性格を把握できていない。ところが少子化や雇用制度の変化といった近年の社会変動は，このライフステージが始まる年齢を押し下げ，人々は早く長くこの段階を経験するようになっている。この新しい実態の固有性を分析する道具を，今後工夫していく必要があろう。

注

1) ただしライフステージと「夫の家事手伝いの個数」は強い関係がある。したがってライフステージをコントロールすると、感情表出行動と「夫の家事手伝いの個数」の関係はなくなる可能性があるのだが、ケース数が少ないため確かめることはできなかった。ここでは、ライフステージの影響が強いが、「夫の家事手伝いの個数」の影響もあると考えてよいと思われる。
2) たとえば村瀬は、無条件に「戯れあって」いた夫婦が、生活が形成されるにつれて「お互いに≪言い分≫というものができて、そういう≪言い分≫をきちんと処理することなく、交わることが難しくなってくる」、その結果「治める」関係が優位になってくる、と記述している［村瀬、前掲書］。
3) 年齢階層構造はこのように人々のライフコースをパターン化させる力として働く。しかしライフコースには個別化の側面もまた存在する（大和、1990）。また年齢階層間の移行基準となる年齢は、時々の社会情勢によって変わる。

参考文献

Aries, Ph., 1960, "L'enfant et la vie familiale sous l'ancien regime", Seail.＝杉山・杉山（訳），1980，『〈子供〉の誕生』，みすず書房

Goffman, E., 1967, "Interaction Ritual : Essays in Face−to−Face Behaviour", Doubleday and Company.＝広瀬・安江（訳），1986，『儀礼としての相互行為』，法政大学出版局

井上俊，1973「『恋愛結婚』の誕生－知識社会学的考察－」『死にがいの喪失』，筑摩書房

川本彰，1978『家族の文化構造』，講談社現代新書

村瀬学，1984『子ども体験』，大和書房

Riley, M.W., Foner, A. and Waring, J., 1988, 'Sociology of Ago', Smelser, N. J.(edt.), "Handbook of Sociology", Sage Publications

佐藤悦子，1986『家族内コミュニケーション』，勁草書房

Shorter, E., 1975, "The Making of the Modern Family", Basic Books.＝田中・岩橋・見崎・作道（訳），1987，『近代家族の形成』，昭和堂

上野千鶴子，1987「選べる縁・選べない縁」，栗田靖之編『現代日本文化における伝統と変容３・日本人の人間関係』，ドメス出版

上野千鶴子・電通ネットワーク研究会，1988『女縁が世の中を変える』，日本経済新聞社

Watzlawick, P., Bavelas, J.B. and Jackson, D.D., 1967, "Pragmatics of Human Communication －A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes－", W.W.Norton & Company

山田昌弘，1987「近代家族形成における『情緒』の二つの意味」『現代社会学』第24号

大和礼子，1990「『中年の危機』の社会的創出」『年報人間科学』第11号，大阪大学人間科学部